

今月より、調剤室で行っている生薬勉強会で取り上げられた生薬についてまとめたものを、『生薬ニュース』としてこちらに掲載していきたいと思っております。ご興味のある方は是非お持ち帰りいただき、ご自分が服用している生薬についてさらに知る機会にしてください。

# 生薬ニュース

近畿大学東洋医学研究所 調剤室

## 今回のピックアップ

えんごさく  
延胡索

おうばく  
黄柏



## エンゴサクって？

エンゴサク（延胡索）：*Corydalis turtshaninovii* はケシ科の植物で、中国の主に浙江省で栽培されており、そこでは左の写真のように青っぽい花が一面に咲いています。わが国で用いるようになったのは、18世紀頃からで、その際、2種類の苗が中国より導入された記録があるものの、現在はどれも栽培されておらず、その種も明らかにはなっていません。

国内で自生し、代用として使われたものに『ジロウボウエンゴサク』というものがあります。これは『“次郎坊”エンゴサク』の意で、スミレを“太郎坊”と呼ぶのと同様に愛称がつけられていますが、スミレと違い現在では郊外でもほとんど見ることができない希少な存在となっています。

日本では鎮痛（痛み止め）や鎮痙薬として用いられることが多い生薬です。【薬能：活血・理気・止血】

## エンゴサクの収穫は大変

エンゴサクとは、右の写真の赤で囲われている淡黄色の丸い塊のことです。産地によってまん丸の形をしていたり少しボコボコしていたりするのですが、丸い方が良質と言われています。

収穫する際は、地上部分が枯れた後、それを抜いてイモの部分（エンゴサク）のみ手でひとつずつ収穫します。

収穫したエンゴサクを大きな鍋でいちど湯通しし、その後乾燥させてから流通されます。

次のページでその様子を紹介いたします。





←この広大な土地から人の手によって、

小さな小さなエンゴサクを収穫し



←湯通しをして乾燥しやすい状態にし、

天日で干してしっかり乾燥させます



## エンゴサクを含む方剤：

あんちゆうさん  
安中散

きしゅくにちんとう  
枳縮二陳湯

きゅうきちょうけついんだいいちかげん  
芎歸調血飲第一加減

けっぶちくおとう  
血腑逐瘀湯

ごしつさんりょう  
牛膝散料

しんこうとう  
神効湯

せつしょういん  
折衝飲

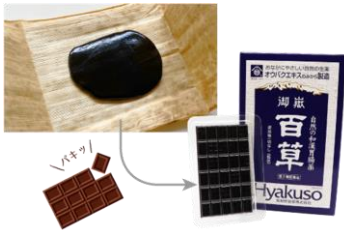
はちみせんきほう  
八味疝気方

## オウバクとは. . .

オウバク（黄柏）キハダ： *Phellodendron amurense* のことで、ミカン科の植物の木の一番外側の皮をのぞいた樹皮のことです。東アジア北部に生息し、日本でも自生していますが市場に出回っているオウバクのほとんどは輸入品です。

主成分である“ベルベリン”というアルカロイドがこの独特の黄色のもとで、オウバクは北部で産出されたのものほど、その成分含量が低く、南部で取れたオウバクには多量のベルベリンが含まれています。

薬能としては、清熱燥湿で、熱を取り炎症を抑え、解毒の作用も併せ持ちます。



## 民間薬での利用

民間薬としての利用で有名なのが、『ダラニスケ（陀羅尼助）』、『ネリクマ（煉熊）』、『ヒャクソウ（百草）』で、その名前は現在でも残っています。

『ダラニスケ（陀羅尼助）』は、僧侶が修行中にお経（陀羅尼経）を読んでいる眠くならないように口に含んでいたことから命名されたようです。『ネリクマ（煉熊）』は、“煮詰めて作った熊の胆（い）のように苦く有効な薬”を意味するようです。『ダラニスケ（陀羅尼助）』も眠気が飛ぶような苦みなのでしょうね。『ヒャクソウ（百草）』は生薬で用いる時と違い、真っ黒の飴のような状態で市場に出回っています。

## オウバクを含む方剤：

うんせいいん  
温清飲

おうれんげどくとう  
黄連解毒湯

けいがいれんぎょうとう  
荊芥連翹湯

さいこせいかんとう  
柴胡清肝湯

じいんこうかとう  
滋陰降火湯

しちもつこうかとう  
七物降下湯

せいしよえっきとう  
清暑益気湯

はんげびやくじゆつてんまとう  
半夏白朮天麻湯

